

I 2015年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015年度大学評価結果総評】

国際日本学研究所では、現在科研費プロジェクトを中心に各種研究活動が活発に行われており、また研究会やシンポジウムなども比較的高い頻度で開催されるなど、研究所として社会的役割を十分に果たしていると評価できる。他方で、科研費プロジェクトの中には、それらのテーマを客観的に見る限り、研究所の目的である「国際日本学の構築」とは関係が希薄と思われるものがあり、これらのプロジェクトが研究所の理念・目的をどの程度反映しているのかが必ずしも明確ではない。2014年度の報告書の総評で、「個々のプロジェクトベースでの総括としてではなく、国際日本学研究所という組織を母体として展開される研究活動について、いわば第三者的な視座から検討されること」と指摘されたように、研究所の理念・目的に沿う研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないかと。今後、当大学で研究所の更なる発展に向けて、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業や科研費基盤研究(A)クラスで国際日本学に密接な関連性を持った研究プロジェクトが立ち上がることを期待したい。最後になるが、SGU 採択を受け、本学の構想名である「サステイナブル社会を構想する」ような研究プロジェクトを本研究所からも積極的に推進されることを期待する。

【2015年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

大学評価委員会からは、各種研究活動が活発に行われている点は高く評価していただいたが、それらが必ずしも研究所の使命である「国際日本学の構築」と密接に関わっていないのではないかとという指摘がなされ、研究所全体としてより大きなプロジェクトを立ち上げてほしいとの希望がだされた。また本学の基本的構想である「サステイナブル社会を構想する」プロジェクトも期待されている。これをうけて本研究所としては、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に代わる私立大学研究ブランディング事業への対応を中心に、あわせて「法政大学憲章」にも沿った形での新たなプロジェクトの企画に取り組んでいる。具体的には「自然」「環境」「風土」「脱中心・地方創生」をキーワードにした総合プロジェクトで、エコ地域デザイン研究センターや地域研究センター等と連携しながら、まさに憲章にいう「地域から世界まで」を対象に、地球規模での「自然」「環境」をめぐる諸問題の解決を目指す実践知形成に取り組んでいる。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- ・公開講演会『欧州コレクションにおける日本の宗教画と「おふだ」が伝える江戸時代の信仰』。2015年7月28日（火）法政大学九段校舎3階 第一会議室。チューリッヒ大学附属民族学博物館が所蔵するヴィルフリード・シュピナー・コレクションを中心に、バジル・ホール・チェンパレンとバルナール・フランクによる日本の仏教美術品の収集の特徴が検討されるという、初の国際共同研究の成果公表の試みとなった。
- ・国際シンポジウム“Buddhist Japonisme: Negotiating the triangle of religion, art and nation”。2015年9月18日（金）、19日（土）。ジュネーブ民族学博物館（スイス）。本研究所公開のデータベース JBAE が欧州で有効に活用されていることが紹介されるとともに、在欧日本仏教美術コレクションの由来がこれまで以上に明らかにされ、今後の在欧日本仏教美術研究の新しい地平が示された。
- ・国際シンポジウム〈中心と周縁—搾取に抗う環境・自然〉。2015年11月21日（土）- 11月23日（月）。アルザス・欧州日本学研究所。近現代の日本が自然との関係で直面する多様な問題を、日欧アジアからの11名の発表者の提題を軸に、学際的かつ国際的に論じた。
- ・環境・自然研究会ワークショップ。2016年3月22日（火）、16時00分から18時00分。法政大学研究所会議室6。犬塚悠氏研究発表会〈環境とリズム：和辻哲郎の倫理学を手掛かりに〉。和辻哲学の環境概念の発展が詳細に跡づけられた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1406/Default.aspx">http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1406/Default.aspx</a> (および成果をまとめた出版物あり)</li> <li>• <a href="http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1413/Default.aspx">http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1413/Default.aspx</a> (および成果をまとめた出版物あり)</li> <li>• <a href="http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1427/Default.aspx">http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1427/Default.aspx</a></li> <li>• <a href="http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1440/Default.aspx">http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1440/Default.aspx</a></li> </ul>
<p>②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)</p> <p>※2015年度に刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を箇条書きで記入。</p> <p>[出版物]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 本研究所の紀要に当たる研究成果報告集『国際日本学』13を2015年12月に刊行した。国際日本学に関する一般的な研究成果報告3本、前の戦略基盤形成事業の総括に当たる特集「〈日本意識〉の過去・現在・未来」に論文9本、小特集「日本意識と女性性」に論文2本、本研究所が公募している若手研究者論文採用研究1本、本研究所内の各研究アプローチ活動報告5本を掲載した。</li> <li>• 『人文地理学への招待』(2015年5月、伊藤達也、環境問題への地理学のかかわりを概説した)</li> <li>• 『唐代史研究』18(2015年8月、小口雅史「在欧吐魯番出土文字資料の断片接続から見えるものーヘルシンキ・マンネルヘイム断片コレクションを主たる素材として」。国際日本学の手法で日本を相対化するとき必要な中国を中心とした東西交渉史を明らかにする資料を新たに学界に提供した。</li> <li>• 『文学』16-6、2015年11月に、本研究所兼担所員による江戸時代の日本観に深く関わる4論文、1翻訳を掲載。(米家志乃布) 近世日本図の北辺・「蝦夷地」表象、(小林ふみ子) 近世日本の異国絵本の愉楽と陥穽、(横山泰子) 小人島はどこにあるのか、(田中優子) 異国の日本化、(小林ふみ子訳) 瀧和亭の花鳥画における日本表象 ロジーナ・バックランド。</li> <li>• [学会発表] (“La médecine moderne et la pensée japonaise - le problème de la transplantation des organes” (2016年3月11日、コートジボワール、フェリックス・ウフェ・ボアニ大学、安孫子信の講演会で、現代医学と日本の思想について臓器移植の問題を中心に論じた)。</li> </ul> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 出版物本体および学会配布資料</li> </ul>
<p>③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)</p> <p>※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や2015年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等) の詳細を箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Dernieres Nouvelles d'Alsace 紙2015年12月5日付に、本研究所がアルザス・欧州日本学研究センターで開催した国際シンポジウム〈中心と周縁―搾取に抗う環境・自然〉についての安孫子信氏へのインタビュー記事が掲載された。</li> <li>• 田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか 江戸から見る自意識の変遷』に対して、以下の書評ないし紹介記事が公表された。 『日本文学』2015年9月号書評掲載(評者井上泰至)。 月刊『地理』2015年8月号書評掲載(評者上杉和央)。 『歴史群像』No.131(2015.6)に紹介記事。 『出版ニュース』2015.5下旬号「ブックガイド」に紹介記事。</li> </ul> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 原紙および刊行物本体。</li> </ul>
<p>④研究所 (センター) に対する外部からの組織評価 (第三者評価等)</p> <p>(~400字程度まで) ※2015年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>本研究所では、大規模プロジェクトであるCOE終了後は実施していない。その代替措置として内部評価の充実をはかってきた。ただし所員の負担を考え、新しい組織を作るのではなく、毎月の運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように工夫してきている。そこでは各研究チーム代表からなされる研究報告・研究成果報告に対して、毎回、その検証評価の議論を、議題上も別途明記して行っている。この方式は以前の大学評価委員会からも認めていただいたので引き続き充実させていきたい。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 運営委員会議事録。</li> </ul>
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p>

※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

・ 2015 年度中応募分（すべて科研費、7 件）

- 基盤研究 (A)、菱田雅晴、腐敗の政治経済学—中国腐敗の特質別出と一般分析ツールの開発をめざして
- 基盤研究 (B)、小林ふみ子、江戸狂歌の地方展開と異分野交渉—代表的判者鹿都部真顔からみる
- 基盤研究 (B)、王敏、治水神・禹王信仰の日本及び東アジアにおける現存形態の総合的研究と現代的価値の考察
- 基盤研究 (B)、山中玲子、能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究
- 基盤研究 (C)、安孫子信、西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する
- 基盤研究 (C)、星野勉、人間と自然の関係態としての「風土」
- 若手研究 (B)、大塚紀弘、資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究

・ 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（すべて科研費、本研究所兼担所員を代表とするもの 11 件）

- 基盤研究 (B)、河内祥輔（代表）・小口雅史（分担）、古文書学的手法の創造による日本・西欧の社会秩序と封建制移行過程の比較研究、2,300,000 円
- 基盤研究 (B)、JOSEF KREINER（代表）・小口雅史（分担）、在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信、3,500,000 円
- 基盤研究 (C)、星野勉、異文化理解へ向けての「間の解釈学」の構築、500,000 円
- 基盤研究 (C)、米家志乃布、19 世紀におけるフロンティアの地域像に関する日露比較研究、900,000 円
- 基盤研究 (C)、川村湊、中南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究、1,100,000 円
- 若手研究 (B)、大塚紀弘、日本中世前期における版本文化の基礎的研究、600,000 円
- 基盤研究 (B)、宮本圭造(代表)・山中玲子(分担)、能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究、2,200,000 円
- 基盤研究 (B)、小口雅史、物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究、4,000,000 円
- 基盤研究 (B)、小口雅史、諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史料学の革新、4,900,000 円
- 基盤研究 (C)、山本真鳥、太平洋現代芸術の人類学的研究—ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に、1,000,000 円
- 若手研究 (B)、鈴木裕輔、戦前の民間組織による対外的情報発信とその影響：英語版『東洋経済新報』を例として、800,000 円
- ・ 同上（すべて科研費、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするもの 6 件）
- 基盤研究 (B)、安孫子信、バルクソン『物質と記憶』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の確立、340,000 円
- 基盤研究 (S)、小口雅史、木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集、300,000 円
- 基盤研究 (A)、菱田雅晴、中国抗議型維権活動拡大のメカニズム：認知の解放・支配方式の転換・動員手段の多様化、500,000 円
- 基盤研究 (B)、山中玲子・宮本圭造、観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究、60,000 円

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・ 研究開発センター提供資料による

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・ 第 2 回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞の公募・審査・顕彰	1.1 ①

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・ 大型プロジェクト実施のための資金獲得…すでに 2015 年度大学評価委員会の評価にもあるとおり、本研究所構成メン

バーの研究活動は極めて活発で、科研費獲得額も標準を大きく超えているように思われる。ただしそれらを総合した国際日本学の構築は、なお道半ばの感がある。法政大学憲章を踏まえて、2017年度の私立大学研究ブランディング事業への応募が強く求められているので、それに応じた態勢をしっかりと固めていきたい。

### 【この基準の大学評価】

国際日本学研究所は国際シンポジウムでの2度にわたる発表、環境・自然研究会のワークショップ開催に加え、初の国際共同研究成果公表の試みとなった公開講演会を開催するなど、高く評価される研究活動実績を残した。研究成果の公表も多く、それらに対する社会的な評価も高い。さらに科研費については、2015年度中に7件の新規応募がなされ、継続分を含め本研究所兼担所員を代表とするものが11件、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするものが6件採択されるなど、構成員による外部資金獲得は極めて活発で、敬意に値する。

## 2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2015年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・質保証に関する委員会としては毎月開催される研究所の運営委員会を宛てている。  
学際的・国際的と言う研究様態そのもの、そしてそれに依拠し形成されている研究組織そのものが質保証のシステムであるといえる。具体的には、研究組織内では、アプローチ代表が、研究会等の報告を運営委員会で行い、別のアプローチ代表や兼担所員より、指摘やアドバイス等を受けるといった形式がとられている。また年度末には、文科省採択研究事業の総括の会を実施している。  
また毎月の運営委員会、年度末の総括の会の形で、各教員が積極的に参加して機能するように工夫している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞の創設および記念講演会の実施。 この賞は、ヨーゼフ・クライナー博士の学問的業績を顕彰すると同時に、海外での優れた日本学研究者を奨励し、「国際日本学」の発展に資することを目的として設けたものである。幸い多数の論文の応募があり、本研究所の世界における知名度をより高めることができた。また受賞者には田中総長より直接賞状を手渡していただき、記念講演も開催できた。この記念講演には国内外各界からの聴講者も多数あった。</li> </ul>	2.1 ①

### 【この基準の大学評価】

国際日本学研究所では第三者評価への代替措置として、内部評価の充実をはかってきたことが、実質的な質保証活動となっている。毎月の運営委員会で、各研究チーム代表からなされる研究報告・研究成果報告に対して、相互評価・批判の学術的議論が行われるように工夫している点は評価できる。国際日本学研究所規程第2条にある「国際日本学研究所の構築と推進」について、さらに議論、検討を深めることを期待したい。

### 【大学評価総評】

国際日本学研究所の研究員が、総じて個々の専門的な研究活動を積極的に行っている点は極めて高く評価されるが、必ずしも「国際日本学研究所の構築と推進」という規程に掲げられている目標に直接結び付いていないように思われる。

「2015年度大学評価結果総評」にある「研究所の理念・目的に沿った研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないか」という指摘に対して、「2015年度大学評価委員会の結果への対応状況」で「新たなプロジェクトの企画に取り組んでいる」と回答している。『(法政大学) 憲章にいう「地域から世界まで」を対象に、地球規模での「自然」「環境」をめぐる諸問題の解決を目指す実践知形成に取り組んでいる』という方向性の中で『国際日本学』をどう位置付けるのかを検討し、プロジェクトを早急に立ち上げることにより、研究所の理念・目的に沿った研究がさらに推進されることを期待し

たい。